

『更級日記』の「富士山」

——「さまことなる山の姿」をめぐって——

和田 律子

はじめに

『更級日記』上洛の記の「富士山」部は、叙述の形態が説明的叙述・比喩叙述・歌枕依拠叙述の三形態に分けられる。『更級日記』には、特に上洛の記の部分には、多くの地名が記されるが、一ヶ所にこのように異なった三形態の叙述方法が用いられることは珍しく、作品内にあつてとりわけ目を引く。単に類型化された富士を描くのであれば歌枕依拠による叙述だけで充分であろう。説明的叙述を目的とするならば後世の紀行文『東関紀行』の「時わかぬ雪なれどもなべていまだ白妙にもあらず」のような実見にもとづく何らかの具体的記述があつてもよさそうである。ところが、『更級日記』の「富士山」はそのような当時の一般的な富士山叙述を逸脱し、擬人化の手法をも加えた先述の三形態の叙述方法で描出される。孝標女は富士山を実際に見ている。それも四年間という長期間父の赴任地上総の地で朝に夕に見続けた。孝標女のこの体験は『更級日記』の「富士山」部の特異な叙述方法となにかかわりがあるのだろうか。歌枕としての「富士山」、霊山とし

ての「富士山」、古来「富士山」はさまざまな側面から捉えられてきた。孝標女は「富士山」をどのようなものとして認識し、「富士山」をとおしてどのような『更級日記』世界を構築しようと試みたのであつたらうか。

先に、「富士山」部の比喩叙述を取り上げ、作者が「富士山」を「白き相を着たらむやう」とたとえた意味について考察を行なった^{注1}。そして、その結果、『更級日記』の「富士山」は、作者が東国で眺めた実景富士山と京の貴族社会における既成の文化的に固定されたイメージに基づく想像上の富士山が微妙に交錯したところに創り上げられた独自の「富士山」であり、そこには、『更級日記』全体に底流すると思われる作者の「物語」への思いが宿っている^{注2}のであろうと結論した。

本稿では、上洛の記の「富士山」部の、特に説明的叙述部分を取り上げて、そこにこめられた作者の「物語」への思い^{注2}について前稿^{注3}との関連で考えていきたい。

1 「富士山」部の説明的叙述

『更級日記』の「富士山」部は、次のように記述される^{注4}。

富士の山はこの国也。わが生ひいでし国にては、西おもてに見えし山也。その山のさま、いと世に見えぬさまなり。さまことなる山の姿の、紺青を塗りたるやうなるに、雪の消ゆる世もなくつもられば、色濃き衣に、白き相着たらむやうに見えて、山のいただきの少し平らぎたるより、けふりは立ちのぼる。夕暮れば火の燃えたつも見ゆ。

本文中に私に付した線は、二重傍線＝説明的叙述、一重傍線＝比喻叙述、波線＝歌枕依拠叙述を示す。わずか数行の「富士山」部が、三形態の叙述方法の組み合わせによって構成されていることが理解されよう。『更級日記』上洛の記は、すでに指摘^{注5}されているように、「歌枕」を連ねて成り立っているが、その「歌枕」は単なる「歌枕」——都人に古来詠みつがれてきた名所のイメージを固定させる役割を担ってきたいわゆる「歌枕」——としてのみならず、孝標女独自の思いを強調し孝標女の内面を投影する機能をも担わされているものと思われる。

「富士山」部の特異な叙述構成も、単なる名所の描写としてでなくこうした作品世界内部へのかかわりのあらわれとして捉えることができるのではないだろうか。特に、説明的叙述部は、「富士山」部の最初に位置し、「富士の山はこの国なり」と「駿河の国の富士山」を念押しする形で始まっている。富士山が駿河の国の歌枕であることは古来有名であったし、本文にも、すぐ前に「これよりは駿河なり」とある。富士山の実景を名所のひとつとして描写するだけであれば、「富士の山はこの国なり」——富士山はどここの国の山かというところの国（駿河）の山なのだと、わざわざ説明強調する必要もなかったであろう。本文は、

「わが生ひ出でし国にては西おもてに見えし山なり」と続くが、この部分については渡辺実氏の興味深い御指摘^{注6}がある。渡辺氏は、『更級日記』には「同定文」（同氏は「同定文」を「一見異なるように見える同一物を、間違いなく同一であると認める時、または同一だといま気付いた時に使われる文^{注7}」と定義する）が多用されているとし、「富士山」部について、以下のように説かれる。

その同定文を孝標娘は、どこからでもそれを認めるしかない、あの富士山に対して用いるのである。彼女以外の誰が、この山に対して同定文を用いる必要を認めるであろうか。孝標娘の場合でもかつて下総^{（下総）}から眺めた時は、すでにそれが富士山であることを教わっていたに違いない。つまり、この同定文は、同じと知った上での同定文なのである。普通なら必要もないこんな同定文が、ここでどうして書かれたか、面白い問題だと思うのだが、恐らく孝標娘にとっては、かつて「西おもて」に見たのも富士、いま目の前に見るのも富士、同じ富士が二つの相をもち、二つながら真実だ、ということが、書き記すに足ることだったのであるまいか^{注8}。

「普通なら必要もないこんな同定文が、ここでどうして書かれたか」——渡辺氏はこう疑問を投げかけ、それは「同じ富士が二つの相を持ち、二つながら真実だ、ということが」孝標女にとって「書き記すに足ることだったのであるまいか」と推測された。私も渡辺氏と同じ部分に同じ疑問を抱くが、それでは渡辺氏の推測された「書き記すに足る」と認めた孝標女の思いの内容はどのようなものであったのだろうか。また、駿河の国の歌枕として周知の富士山を、なぜ敢えて「富士の山はこの国なり」と限定強調する必要があったのだろうか。一見いわずもがなと感ぜられるこの一文をここに記しつけた孝標女の意図

についても、いま一度心を及ばさねばならないのではないだろうか。

また、説明的叙述部で、「富士の山は」とともに注意されなくてはならないのは、山の「さま」であろう。「その山のさま、いと世に見えぬさまなり。さまことなる山の姿の、紺青を塗りたるやうなるに」と、わずかな部分に「さま」が三回もあらわれる。これは、いわゆる近接同語表現としてだけでは処理しきれないものを含んでいるように思われる。『更級日記』の中で、本文の内容にかかわる同一語がこのようにわずかな部分に三回もくり返されることは、他に例をみない。しかもこれだけ「さま」にこだわりを持つておきながら、「さま」の具体的様相には全く触れず「紺青を塗りたるやうなるに」とすぐに比喩に移っていつてしまふ叙述の形態も気になる。先述のように、他の紀行作品の富士山は作者の感動や感想の言辞を伴って具体的に山容が描写されているからである。

『更級日記』「富士山」部の説明的叙述部における以上の二点について、以下に少し深く触れていくことにしたい。

2 「富士の山はこの国なり」

既述のように、富士山が駿河の国の山であることは古来からの共通認識であった。特に、和歌の世界では、『万葉集』や『記紀』の古代伝承の世界以来、歌枕として類想的発想共通語彙の多い地名の代表であった^{注9}。『古今集』仮名序には「富士の煙によそへて人を恋ひ」「人知れぬ思ひをつねにするがなる富士の山こそわが身なりけれ」「世の人の思ひするがの富士の嶺の燃ゆるおもひも飽かずして」とあり、「燃ゆる恋の思ひ」を「するがの富士」というパターンがすでに平安時代前期には人々に受け入れられていた様子が窺われる。富士山は、このように、噴煙を上げる山の姿が恋の思いと結びつき、その恋の思いを「す

る駿河の山」という一定の型によって認識されていた山だった。こうした歌枕としての富士山の把握は、富士山が煙を上げなくなってしまう近代にまで及び、「和歌の世界では明治維新の頃まで富士山は常に噴火を続けていることになって^{注10}」いて、樋口一葉も噴火の歌を詠んだという。和歌の世界において「思ひをつねにするがなる富士の山」という伝統的な型が、想像以上に深く強く浸透定着していたことが知られる。

九世紀後半頃の成立になる都良香作『富士山記^{注11}』には、富士山が次のように記される。

富士山者、在駿河国、峯如削成、直聳属天、其高不可測、（中略）其聳峯鬱起、見在天際、（中略）蓋神仙之所遊萃也、（中略）日加午天甚美晴、仰觀山峯、有白衣美女二人、双舞山巔上、（中略）古老伝云、山名富士、取郡名也、山有神、名浅間大神、（中略）亦其頂上、匝池生竹、青紺柔懷、宿雪春夏不消、山腰以下、生小松、腹以上、無復生木、白沙成山

以上の記述をとおして窺い得る富士山は、駿河の国の山で高峻な峯は天に届くほどの山である。それは、神仙の遊ぶ神の山、白衣の二人の美女が舞う仙山であった。頂上は夏でも雪が消えず、中腹以上は白色の山である。しかし、山頂にある池の周囲には「青紺」の竹が生えている。『富士山記』をとおしての富士山は、神仙の趣き深い山である。山本登郎氏は、富士山は「恋の思ひ」のイメージでうたわれることが多いが、「御山」と敬称をつけて詠まれることもあり、富士は「駿河の神の山」であったとしておられる^{注12}。富士山が恋の思いを詠み込む歌枕である一方で、天に近く仙女が遊ぶ神の山として古来人々に捉えられていたことが以上から窺われよう。

『竹取物語』でも、富士山は駿河の国のふしぎな山として語られる。

「この都も近く、天も近くはべる」山の頂上で、帝がかぐや姫からもらった手紙と不死の葉を焼いて以来、「その煙いまだ雲の中へ立ちのぼるとぞ、いひ伝へ」られる富士山は、駿河の国の山であった。『竹取物語』で「駿河の国にある」「駿河の国にあなる」山と、「駿河の国」が二度くり返し記されていることは注意されよう。富士山は「駿河の国」の山であったのである。

ところで、『更級日記』には、「富士山」の山のさまは「紺青を塗りたるやう」であったとある。この「紺青」は、既に御指摘がある^{注13}ように、『蜻蛉日記』の「九月のつごもり、いとあはれなる空の気色なり。(中略)遠山をながめやれば、紺青を塗りたるとかやいふやうにて」との類似がみられるところである。しかし、「紺青」の用例に当たってみると用例は少なく、『蜻蛉日記』『更級日記』以外には、『竹取物語』『栄花物語』『大鏡』『小右記』『御堂関白記』に各一例ずつみられるだけである。記録類は別として、『更級日記』以前の用例が『蜻蛉日記』と『竹取物語』に各一例ずつのみという点には注意しておく必要があるだろう。また、「紺青」は「金青」とも表記され、『和名抄』に「金青者空青之最上也」、「色葉字類抄」に「金青ジャウ 俗紺青同」とある(『竹取物語』『小右記』も「金青」と表記する)。紺青は、古くに中国から伝わった色で、飛鳥時代から使用されている天然の鉱石から作られる鮮青色の光沢のある顔料だという^{注14}。「紺青」は、以上のように、『更級日記』以前には用例のきわめて少ない、かつ、異国の情趣を強くたたえた語であった。こうした特異な語である「紺青」を含む当該部を『蜻蛉日記』の遠山描写との関連だけで理解してしまつてよいのであろうか。

『更級日記』以前の作品で『蜻蛉日記』とともに「紺青」の用例を一例持つ『竹取日記』では、火鼠の皮衣を「金青の色なり」とする。かぐや姫から火鼠の皮衣を探してくるようになされた財産家の右大臣

阿倍御主人は、唐に皮衣を求める手紙を出す。その返書にいう。「火鼠の皮衣、この世になき物なり。音には聞けども、いまだ見ぬ物なり」。そして、入手後の手紙にいう。「この皮は、たやすくなき物なりけり。昔、かしこき天竺の聖、この国に持て渡りてはべりける」。この箇所について、神野藤昭氏は、「シルクロードをへて天竺から渡来したものである」といふれこみである。ここには国際化されていた平安初期の世界が描かれていておもしろい^{注15}と、高価な舶来品に敏感に反応した京の貴族社会の様子を指摘される。『竹取物語』以外の用例をみても、「蔵人は(中略)院のは唐紋を泥紺青して」(『栄花物語』^{歌合})、「奏唐物解文」(中略)紺青百両(『御堂関白記』中)のように、「紺青」は唐の物品として記載されている。当時の京においては、「紺青」は大層珍しく貴重な輸入品であり、その色は異国情緒にあふれた趣きのあるものであったことがこれらから窺われよう。

なお、『宇津保物語』には、俊蔭が波斯国(ペルシャ)に流され仙山に入った時の記述に、「その山のさまはこゝろことなり、山の地はるりなり」とある。日本の山とは異なる異国の仙山の地肌を「るり」色だとする。「るり」は天竺の宝石で、特に青色のものが多く、京の人々にとっては「紺青」と同じく青色の舶来の高価な物品であった。この「紺青」「るり」の両者が異国の情緒をたたえた語として先行物語に共に用いられ、特に『宇津保物語』は『更級日記』『富士山』部と同じく山の場面で、「心ことなる」山の「さま」が「るり」であったと表現されている。それにもかかわらず、『更級日記』が「さまことなる」山の「さま」に「紺青」を選び取っていることは、やはり考えさせられる。「紺青」が唐天竺の異国の情趣深い色で、その用例のきわめて少ないことを考え合わせるとき、孝標女にとつての「紺青」は『竹取物語』の皮衣の「金青」の色でもあったのではなかったろうか。『蜻蛉日記』の遠

山描写が背景にあったかもしれないが、さらに、それを超えて物語世界へのこだわりにつながる用語として、『更級日記』の「紺青」を捉えることはできないものであるうか。孝標女にとつての「富士山」は、「この都も近く、天も近くはべる」山、かぐや姫の手紙と不死の薬を焼いたために「その煙いまだ雲の中へ立ちのぼる」山、そして、天竺渡来の「紺青」の皮衣を望み、ついには天女を従えて天に上っていった「変化の人」かぐや姫につらなる山であったのではなかったろうか。そうした『竹取物語』への思いの中での「富士山」であったからこそ、その山の「さま」に「紺青」を選び取ったのではないかと思うのである。

「富士の山はこの国なり」と書き始めたとき、東国上総の自分の部屋からも「西おもて」に見えていた山ではあるが、富士山は、やはり、『竹取物語』で「駿河の国にある」「駿河の国にあなる」と二度もくり返されたこの「駿河の国」の山なのだと、『竹取物語』を介して浪漫の世界に連なる山として「富士山」を捉えようと孝標女は試みたものではなかったろうか。「富士の山はこの国なり」の「は」には、以上述べてきたような、物語世界に引きつけて「富士山」を感じ「富士山」を語ろうとする孝標女の、「物語」へのこだわりがこめられているように思われる。

3 「むまい」となる「山」

説明的叙述部分で、「富士の山は」とともに注意されるのが、山の「さま」であろう。「その山のさま、いと世に見えぬさまなり。さまことなる山の姿の、紺青に塗りたるやうなるに」と、「さま」がくり返されていることについては先に述べた。富士山の「さま」に孝標女がいかにこだわっていたかが窺われよう。

それでは、「世に見えぬさま」「さまことなる山の姿」とは、具体的にはどのような山容の説明なのであろうか。諸注釈に拠ってみたい。(以下の傍点はすべて稿者が付したものである。)

- ① 日本古典全書 とくべつな形をした山で。
 - ② 日本古典文学大系 (注なし)
 - ③ 新日本古典文学大 (注なし)
 - ④ 日本古典文学全集 その山の姿は、まことに世にも類のない形である。一風変わったなだらかな山容が
 - ⑤ 新編日本古典文学全集(④に同じ)
 - ⑥ 講談社学術文庫 その山の姿は、まったく世間に類のないようすをしている。風変りな山の姿が
 - ⑦ 全釈更級日記 その山の様子、それは、めったに世間に見られない姿である。一風変った山の姿が、
 - ⑧ 新潮日本古典集成 (この山の) 姿はまったくこの世に類を見ない。
 - ⑨ 日本の文学古典編(ほるぷ出版)
その山の姿は、全くほかには見られない美しい形である。ほかとは違う山の形で
 - ⑩ 更級日記全評釈 その山の姿は、なかなか世に見られない形だ。趣きの独特な山の姿が
 - ⑪ わたしの古典(阿部光子訳)
その山の姿は、この世にくらべるものもない。一般の山の形とは似ても似つかぬ麗しい姿で
 - ⑫ 日本古典文庫(井上靖訳)
その山のさまはまことにこの世に見られぬよう、なものであります。普通の山とはすっきりがった山の姿が
- 以上、十二例を通覧して感じることは、「白き相」の解釈^{注16}と同様に、

この部分の本文が従来さほど注意を払われず読み過ごされてきたのではなかったかということである。「さまことなる」に頭注や語釈欄で触れるのは数例にすぎない。また、「この山のさま、いと世に見えぬさまなり」の訳文については、「この世に類を見ない」(⑧)「全くほかには見られない」(⑨)でほぼ一致し、「富士山」が全く例をみない形の山であると漠然とした解釈をしている。次の「さまことなる山の姿」の部分では「さまことなる」と「山の姿」に分けてみていくと、「さまことなる」は「一風変わった」(④)「風変りな」(⑥)「一般の山の形とは似ても似つかぬ」(⑪)、「山の姿」は「麗姿」(⑧頭注)「麗しい姿」(⑪)「山容」(④)「山の姿」(⑥⑦⑩⑫)「山の形」(⑨)となる。「さまことなる」の訳からは、富士山が一般的な山の形とは明らかに異なる形であることは理解できるが、それでは具体的にはどのような山の「さま」が思い描けるかというと、それは不明確である。「山の姿」は、ほとんどの注釈書が「山容」「山の姿」とするなかで二例だけが「麗姿」「麗しい姿」と山の姿に具体的な評語を付加している。しかし、「山の姿」をなぜ「麗しい」と訳すことができるのかについての根拠はこれも不明確である。その解釈には、当然のことながらすぐ上の「さまことなる」が関係してくるのだろうが、諸注釈書はほとんど触れていない。そうした中で『集成』が「さまことなる山の姿」を「一風変わった山容」と訳し、それについて「富士山の際立った麗姿」と丁寧な注を施していることは目を引く。すなわち、『集成』は「富士山」を「一風変わった麗姿」の山として捉えるのである。他の諸注釈に比べ、「富士山」の「さま」に深く踏み込んだ注釈がなされている点は評価されよう。しかし、「一風変わった」と「麗姿」を接続させたとき、両者の間にはやや異和感があるのではなからうか。「一風変わった」あるいは「風変りな」は「麗姿」のように賞賛に属する語につく表現として果して

適切なであろうか。他の訳注が「風変わりな」「とくべつな形」「普通の山とはすっかりちがった山の形」を「美しい」とは記さないのは示唆的である。しばらく、「さまこと」にこだわってみよう。

「さまこと」は『日本国語大辞典(「様異」項)』によれば次のとおりである。(以後、『日国』と略す。)

1 普通ではなく異様なさま。普通と異なっているさま。

(例)「おどろおどろしうさまことなる夢を見給て」(源氏^{若菜})

「親たちは、いとあやしくさまことにおはすることこそとおぼしけれど」(堤中納言^{虫めづる姫君})

2 格別にすぐれたさま

(例)「さまことにいみじうねびまさり給ひにけるかなと類なくおぼえ給ふに」(源氏^{賢木})

これによれば、「さまこと」は、1 異様、2 格別にすぐれている様、の二義を持つ語であることがわかる。試みに、菅原孝標女作と伝えられる『夜の寝覚』『浜松中納言物語』から「さまこと」を探すと次の六例である。(引用は両作品ともに『日本古典文学大系』による。「こと」の用字は殊異事とまちまちであるが、索引ではすべて平仮名で一括して載せられている。)

①寝覚卷一 (石山の姫君) いみじう心ぐるしうあはれに、さまことに思ひ侍りぬべし。(p.66 頭注二) ひどく気の毒に、可憐に特別に思いますでしょう)

②寝覚卷一 (中納言の言葉) 「おもかげはなどてきはさまことにすぐれしぞ」(p.72 頭注一〇) どうしてあんなに異様に美しかったのだらう)

③寝覚卷五 姫君のおはします町は、いとことになにの草木もさまこととに造りみがき増いたるに (特別に面白く美しく造りあげてあるが)

④寝覚巻五 こなたには「住みはつべき世かは」とのみ、さまことに思しとりつ、（また違つたふうにお思いこみになって）

⑤浜松巻一（唐后の様子すばらしきを見て）「これこそめでたくさまことなりけれ」と見るに

⑥浜松巻五（中納言の様子について）かたみに心のうちのくるしげなるさま、ことなり（p.89頭注一四 普通とはかわつてゐる）

六例を検討すると、①③⑤は、格別すぐれているの意であり、三例ともにもどるようにすぐれているかを表わす修飾語（波線部）を伴っている。これは『日国』『様異』項2の用例にも共通してみられることである。一方、②④⑥は異様の意である。②は、「すぐれしぞ」を伴って美しさを強調する「さまこと」（『日国』2）のように思われるが、内容を見ると姫君の美しさがこの世のものではない、すなわち異様なほどの美しさを表わす場面であり、解釈上は『日国』1に入るべき例であろうかと考える。また、⑥のように、単独で修飾語なしで用いられる場合もある。以上からすると、「さまこと」は、本文の内容によって異様、すばらしいの両義に解釈することが可能である。ちなみに、『源氏物語』には四十四例の「さまこと」があるが、約八割が「格別すぐれている」である。しかし、わずかとはいえ「異様」「ふしぎな」の例もあり、やはり両様の解釈がその場面の解釈、表現に応じて可能であることが窺われる。

さて、再び『更級日記』本文に戻りたい。山の「さま」は「いと世に見えぬ」ほど「さまこと」であつたという。「世に見えぬ」は世間に類がないの意で、すばらしいもの珍しいこと全般に用いられる語であるから、これが『日国』『さまこと』項の1・2いずれに属してもおかしくはない。解釈は両用に可能なのである。先に列挙した諸注釈の富士山の「さまこと」の解釈が分かれるのも無理のないところである。

それでは、『更級日記』の「さまことなる山の姿」はこの両義のどちらで解釈すべきなのであろうか。孝標女はどのような「富士山」を思い描いて「いと世に見えぬ」「さまこと」と記したのであろうか。『更級日記』の「富士山」は「（おどろおどろしう—『日国』1の用例—）さまことなる」山なのか、「（めでたく—『浜松』⑤—）さまことなる」山なのか。その判断が当該部の文脈、表現にかかっているであろうことは今みてきたとおりである。とすれば、その手がかりはどこに求められるのであろうか。私はそれを前節の「富士の山はこの国なり」とのかかわりから考えられはしないものかと思うのである。

すでに述べてきた^{注17}ところであるが、『更級日記』の「富士山」は神の山としての近づきたい神秘性霊性と天女やかぐや姫につらなる浪漫性神仙性とを合わせ持った山、実在感の希薄なはるか遠くの山として、孝標女の「物語」への思いの線上に捉えられた山ではなかったかと思われる。先述したが、『宇津保物語』に、波斯国に流された俊蔭が仙人に案内されて仙山に入る場面がある。この仙山は俗世の者は入れないのだが特に許されて入った俊蔭はそこで仏に出会う。その部分は「その山のさまはこころことなり、山の地はるりなり」とされるが、『宇津保物語・俊蔭』（余説）によれば、ここは『竹取物語』との類似が指摘できる箇所だという。〔余説〕は、かぐや姫が「衣着せつる人は心ことなるなり」と羽衣を着ると地上の人と心の交流ができなくなってしまうと語る部分を引き、「どうやら竹取と宇津保、少なくとも俊蔭卷とには、天上界の人には、地上的な愛情、人情は通じないという共通認識があるようだ」（p.80～p.81）とされる。つまり、『宇津保物語』の「さまことなる山」は、地上のこの世とは異なる世界、『竹取物語』の天上界に重なる世界として描かれているというのである。こうしたことから考えると、現実世界から遊離した世界を「さまこと」とする当

時の感覚がみえてくる。とすれば、『更級日記』の「富士山」に用いられた「さまこと」もこれと同じように捉え、「異様」だが、他とは異なるというだけの「異様」、おどろおどろしい「異様」ではなく、また、一方、すばらしい、みごとだの意の「格別さ」でもなく、浪漫性と靈性とは絡みあった浪漫の世界に支えられたものとして孝標女に選び取られた語としてみることができないのではないだろうか。そして、そうした山のさまを孝標女は「色濃き衣に白き相着たらむやうに」とたとえたのである。孝標女にとって「富士山」は実景描写や類型表現の対象としてのみ捉えられていたのではなく、「物語」へのこだわりという独自の目と意思をもってここに作り上げられた世界であったと思われる^{注18}。そして、こうした思いが、「富士山」部を「富士の山はこの国なり」と書き始めたときに既にこめられていたであろうことは前節で推測したとおりである。すなわち、「さまことなる山の姿」は、如上の意味において「物語」へのこだわりが底流する「富士山」部を構成する重要な部分として、「富士の山はこの国なり」を受けてここに記されたのではないかと思うのである。このように、「さまこと」は、物語世界をとおして異界につながり、現実離れた浪漫的な趣きの微妙に入り混じった世界を表わす語として捉えられるのではないだろうか。

しかし、それではその「さま」は具体的にはどのようなものであったのか。先に提出した疑問はあいかわらず解けてはいない。「さまこと」を既述のように捉えるとき、その流れの中で「さま」にゆきつく手がないではないものであろうか。少し遠まわりをしながら考えてみたいと思う。

4 「富士山」の姿

前節で考えたように、「富士山」の姿を単に「おどろおどろしい」で

もなく、単に「格別」でもない、孝標女の「物語」への思いに支えられたものとして捉えるとき、「富士山」は孝標女にはどのようなイメージの山としてあったのであろうか。孝標女のイメージしたであろう「富士山」の姿をしばらく追ってみたいと思う。

記録に残された富士山

平安時代には富士山は「決して多く描かれたわけではな」かった^{注20}。記録に残る最初の富士山の絵は、藤原伊尹（924～972）家の名所絵屏風に描かれたもの^{注21}だが、絵そのものは現存せず、大中臣能宣の家集に「小野宮太政大臣の七十賀給しに」「屏風の歌よめ」との命により富士山を読んだ折の詞書「くれの春、ふしの山ちかき所に人の家侍り」が残されている。名所絵に富士山が描かれた記録は、中古において現在確認できるのはこの一例だけで、次に確認されるのは、後鳥羽院の「最勝四天王院障子名所絵」の画題の中において『明月記』承元元年（1207）五月十四日条）である^{注22}。これをもとにしての先述の成瀬不二夫氏の御発言である。

しかし、名所絵には多く描かれることはなかったとしても、平安時代の京の貴族たちの間では富士山はよく知られた山であった。「天曆の御時の中宮の歌合に、勝態に、富士の山沈して作りて、いただきより出だせる煙の下に、清正、内裏の御方に、世に人の及びがたきは富士の山麓に高きおもひなりけり^{注23}」（傍線稿者）。これは、正確な年時は不明だが、萩谷朴氏の御推測に従えば、天曆九十年（956～957）頃の、村上天皇中宮安子歌合の歌である。ここからは、歌枕「富士山」の常套を踏んだ和歌の形と、それにそった形で富士の風景を再現して楽しんだ当時の人々の様子とが窺われる。また、『狭衣物語』には、雪遊びに興じる女房たちが「同じくは富士の山にこそ作らめ」と言え

ば、「越の白山にこそあめれ」など言ふめり」とあり、結局、「富士山を作り出て煙立てた」という^{注24}。これらからは、香料や雪で富士山の形を作り、白雪の積もった頂きから煙を立ちのぼらせる趣向を楽しんだ京の人々の「富士山」受容の一端が窺われる。当時の京の貴族たちは『伊勢物語』第九段の「富士の山を見れば、五月のつごもりに雪い」と言う降れり。時知らぬ山は富士の嶺いつとてか鹿の子まだらに雪の降るらん。この山は、ここにたとへば、比叡の山を二十ばかり重ねあげたらんほどして、なりは塩尻のやうになんありける」ような山を「富士山」として思い描いていたのであろう。形は塩尻のような円堆形^{注25}で、高さは比叡山を二十ほど積み上げたように高く、夏でも雪が降り続き、その頂上からは煙が立ち上るといふ、身近なものと全くの空想とを混然とさせてイメージを作り上げていったさまが、この文章からは窺える。京の人々にとって、その山容は想像しがたい遠い異国の山、実存感の希薄な抽象的イメージしかわかない観念の世界の山として「富士山」は捉えられていたことであらう。

さて、名所絵は、実景そのままを写すことよりも各名所の特徴を誇張して示し、和歌の知識をとおして鑑賞者に名所を容易に知らせることが重要だったという^{注26}。名所絵を見て和歌を詠み、歌枕を詠みこんだ和歌から得たイメージをもとに名所絵が描かれ、両者のこのくり返しによって歌枕はそのイメージを固有の型として獲得していったのに違いない。富士山も、名所絵と和歌の双方の力によってそのイメージが抽象化され象徴化され、京の人々の「富士山」として一定の型として認識されていたことであらう。

富士山図の変遷

では、平安時代の京の人々は、どのような名所絵を見て「富士山」

を想像したのであろうか。富士山は和歌には好んで詠まれたが、それに比べると、名所絵の画材として用いられることは大変少なかったようである^{注27}。

現存最古の富士山図は^{注28}、四天王寺壁画の「聖徳太子絵伝」（延久元年1069作、現在、東京国立博物館法隆寺献納宝物館蔵）に描かれたもので、成瀬不二雄氏によれば^{注29}、「（山は）もとは鮮やかな緑色だったと思われ」「頂上にまず雪が認められず、山の傾斜も実景より余程急である。（中略）頂上の下の方にも山にも峰が重なっているようである」という。実際に、図録^{注29}によって「聖徳太子絵伝」（A—以下、記号で示す）の富士山を見ると、これが富士山なのだろうかと思ふほどに現在の富士山の実景からはかけはなれた山容である。このような富士山図について、成瀬氏は次のように述べておられる。（以下の傍線は稿者による）。

平安時代の富士図は山の傾斜が急で、頂上が幾つかの不規則な峯にわかれ、その下にも峯が重なり、主山が緑色で、ときに群青の遠山の加わることがあると言える。こういう後世と全く異なり、実景とも似ていない富士図は、中国の唐時代の青緑山水を連想させる。ふつう、青緑山水は（中略）主山は緑色だった。また、山腹や山壁の稜線には、緑青の上にさらに群青を重ねたり、金泥や細い線の皺を併用する場合があるため、金碧山水とも呼ばれたという。

そして、次のようにも述べられる。

もちろん、名所絵や太子絵伝の富士山を描いた近畿の画家は、いちいち駿河国まで行って、実景を見ようとはしなかっただろう。しかし、彼らとて『伊勢物語』にいうように、富士山が「塩尻」のような形、つまり白い円錐形であることは知っていただろうか

ら、もっとそれらしい形に描くことはできたと思われる。それなのに富士図は平安時代後期に下つても、手法のみか図様まで、唐代の山水画に近かったようである。

このように、成瀬氏は④の富士図に唐絵の影響を見ておられる。また、形の特異性にも言及される。成瀬氏の御指摘を受けて、改めて富士図に当たってみたい。取り上げたのは以下の五例である。

- ③ 伊勢物語絵巻 和泉市久保惣記念美術館蔵 十三世紀末頃成立
- ④ 伊勢物語絵巻 個人蔵 住吉如慶筆 十七世紀成立
- ⑤ 渡辺家本西行物語絵巻（西行法師行状絵詞） 俵屋宗達筆 十七世紀前半成立（十六世紀に成立した「五卷本西行物語絵巻」を宗達が模写したものである）

⑥ 月次風俗図屏風（富士の巻狩場面） 東京国立博物館蔵 十六世紀成立

- ⑦ 冷泉家所蔵扇 江戸時代成立

⑧は『伊勢物語』第九段東下りの富士図であるが、④の富士図に近く、背の高いおわん型をしている。色彩も、全体が銀ネズ色で山裾に緑が塗られ山頂の稜線にうっすらと白色が置かれるだけで、成瀬氏のいわれる唐絵の山に似る。現在の富士山の実景からはほど遠く説明なしには富士山とは認定できない山容である。これは、古い山水屏風（たとえば、東寺伝来・十一世紀末、神護寺蔵・十二世紀、金剛峯寺蔵・十四世紀、醍醐寺蔵・十五世紀など）の山々の描かれ方に似る。同じ『伊勢物語絵巻』の東下りの富士山でも、③となると、山頂が小さく三峰に分かれ、山裾はなだらかに長く引き、全山白色のいわゆる富士山型の山になる。また、①（西行が『伊勢物語』第九段東下りを回想している作品）は、山頂の三峰が③よりは粗いが裾はなだらかに延び全体は白色で、裾野に緑の木立が描かれる。室町時代の作とされる⑨も、

山頂の趣きは⑩に近く、全体が白色で裾の広がり具合は⑧と⑨の間ほどのものである。また、⑥の扇の富士山は、いわゆる「白雪土」で現代でもよく描かれているような典型的な富士型をしている。

細部まではなかなか表現しきれないが、このように一応比較してみると、①⑥のような現代にも馴染み深い白富士型の富士図が描かれるようになったのは、比較的歴史が浅いことが窺えよう。成瀬氏が指摘されるとおり³⁰、平安時代の富士図は、細長い楕円を立てたような塊状の山容で山肌は緑、その画例は多くはなかったのである。

富士山が名所絵としてあまり取り上げられなかった理由を成瀬氏は、「平安時代の貴族は遠方の壮大な風景よりも、都に近い優しい自然を好んだ」結果、「都から遠い東国の『高峻なる險山』である「富士山」とりあげられなかったのではないかと推測される。しかし、これについて、成瀬氏は、一方で、「都から遠い「浅香沼」「浮島」「こゆるぎの磯」「更級」「白山」「八十島」などはかなりの頻度で平安時代の名所絵に登場するから、日本を代表する名山として古くから知られている富士山が冷たく扱われているのは不思議ともいえる³¹」と疑問を呈してもおられる。たしかにふしぎなことである。それについて、山下善郎氏の御指摘は示唆に富む³²。

平安鎌倉時代の物語絵や絵伝の背景として登場する富士山は、周囲から突出して忽然と現われるように配され、実際より急峻な姿、左右対称に整形された円錐状に描かれている。（中略）富士山は都（京都）から遠く離れた山、噴火する山、あるいは「比叡山の二十倍もの高さ」（『伊勢物語』）をもつおそろしく高い山であり、神々の住む近寄り難い存在、遠望する存在としてイメージされており、それが富士の姿の共通概念となつていなのだ。（傍線稿者）

山下氏はこのように富士山の霊性を指摘される。描かれた富士の「周

囲から突出して忽然と現われる」姿、「遠望する」構図に当時の人々の抱く富士山のイメージを看取されるのである。大変興味深い御指摘である。富士山は、京の人々にとって、同じ信仰の山ではあっても比叡山や白山のように親しみをもって受け入れることのできる山ではなく、「神さびて高く貴き」（『万葉集』三三〇山部赤人）「靈しくもいます神かも：駿河なる不尽」（『万葉集』三三二高橋虫麻呂）のように畏怖の念を抱かせる近寄り難い山であったのだろう。この特殊な霊山認識は鎌倉時代にもみられ、富士山を実際に見た京の人々は「都にて空に聞きしにしろし、半天にかかりて群山に越えたり。（中略）まことにこの峯は、峯の上なき霊山なり」（『海道記』）、「絵の山よりもこよなう見ゆ」（『東関紀行』）と記した。これらからは京の人々が富士山を霊山として認識していた事実と、京で見聞していた「富士山」より実景富士山の方が感動的な美しい姿であったらしいことが知れる。京の人々にとって、絵画工芸文学などをおして知っていた「富士山」と実景富士山との間には想像以上に大きな隔たりがあったのであろう。

富士山の用例を探していて、歌枕としての和歌詠作例を除くとその用例が思いのほか少なく、あったとしても類型的表現であることに驚かされた。しかし、逆にいえば、これが当時の京の人々の一般的な富士山認識を浮き彫りしているということなのだろう。富士図自体があまり多くはなく、描かれたとしても既述のような富士図であったとしたら、京の人々が富士山の実景を思い描くことは困難なことであったにちがいない。

以上が、平安時代の京の人々の「富士山」認識のあらましである。そして、孝標女もその一員であったことを確認しておきたい。

5 孝標女の「富士山」

平安時代には、やまと絵と唐絵は並存拮抗していたという^{注33}。また、孝標女は絵画に対する志向性が強く、孝標女作と伝えられる『夜の寝覚』『浜松中納言物語』にも唐絵への興味が窺える^{注34}。当時の「絵」というとすぐに思い浮かぶのが『源氏物語絵巻』のようなやまと絵であるが、村重寧氏によれば、平安時代の、特に上流貴族階級にあつては屏風絵として唐絵に触れる機会が存外多かったとのことである^{注35}。孝標女が祐子内親王家女房として頼通文化圏に身を置いていたことを考えると、孝標女が唐絵を見る機会に恵まれた可能性は低くはないと思われる。祐子内親王のもとに有能な女房を集め内親王の養育に砕心した頼通である。若い時期から書物蒐集に熱心で平等院経蔵に多くの書物を集めた頼通である^{注36}。祐子内親王に自分の集めた絵や書物を贈っていたであろうことも想像に難くない。さらに、孝標女は菅原道真直系の学問の家の娘である。唐の文物が身近にあったこともまた想像される。唐絵に触れ得る諸環境は整っていたと思われる。そうした目で改めて「さまことなる山の姿」に目を向けてみたい。先に「物語」につらなる語として考えた「さまこと」であるが、「その山のさま、いと世に見えぬさまなり。さまことなる山の姿の、紺青に塗りたるやうなるに」と読んでくると、これは先に成瀬氏が指摘された唐絵風の富士山——傾斜が急で頂上が幾つかの不規則な峯に分かれ青いおわん型の山——、あるいは、唐の「青緑山水」を彷彿させるものではないだろうか。また、先に触れた都良香『富士山記』の「峯如削成、直聳属天、其高不可測」も想起される。孝標女を取り巻く諸環境を考えると、このような描かれ書かれたものからのイメージの喚起も皆無とはいえないのではなからうか。「さまことなる山の姿」という一見無表情

な表現の奥には、富士山を靈山―唐絵に描かれた山の姿―京の貴族社会の一員としての視点―すなわち、京の貴族の一般的認識に沿って捉えようとする孝標女の姿勢と、物語にこだわり物語への思いの一環として「富士山」を作品にあとづけようとする孝標女の思いが交錯して存在しているように思われる。

数十年前に東国で見た実景富士山をはじめとして、「富士山」は孝標女の中でいくつもの相をみせたであろう。その「富士山」を、単に実景として説明描写するのではなく、また、歌枕の類型表現のみにも終わらせず、京の貴族の想念の中で共通していたであろう唐絵の世界を巧みに取り込むことで貴族社会の一般的な富士山認識を示しつつも、比喩表現と連動させながら「物語」の思いをも底流させた、現実から遊離した「さまこと」なる「富士山」を作品に記しつけようとしたのではなかったろうか。「富士山」部の説明的叙述部を、以上のように意味づけてみることはできないものであろうか。

おわりに

『更級日記』『富士山』部の説明的叙述について、「さまことなる山の姿」をめぐる、そこにこめられた孝標女の意識を中心に考えてきた。それによれば、孝標女にとって「富士山」は実景でもなく歌枕でもなく、上洛の記全体を貫く孝標女の「物語」へのこだわりの思いに沿って言葉を選びつつ叙述された「富士山」ではなかったかと思われた。数十年前に「西おもて」に朝夕眺めた実景富士と、数十年前京で眺めたであろう描かれた富士と。そして、歌枕と先行作品の世界と。孝標女の心の中でこれらが交錯融合し、「物語」への思いを点綴しつつ京へと上ってゆく旅の記の、主題にかかわる重要な場面として「富士山」は位置づけられていったのではなかったろうか。

「果して実景だったのだろうか」―富士山叙述についてこう疑問を投げかけられた津本信博氏の御指摘^{注37}が重いものとして改めて想起される。孝標女によって「さまことなる山」と捉えられた「富士山」の奥には、以上述べてきたように、実景と類型と想像とを融合させることにより「物語」へのこだわりの姿勢を示そうと試みた孝標女の思いが深くこめられているのではないかと思うのである。

注

◎『更級日記』本文は、秋山虔氏校注『更級日記』（新潮日本古典集成）に拠った。その他の作品の引用本文は以下のとおりである。

『竹取物語』 堀内秀晃氏校注 新日本古典文学大系
『伊勢物語』 福井貞助氏校注・訳 日本古典文学全集
『蜻蛉日記』 今西祐一郎氏校注 新日本古典文学大系
『宇津保物語』 上坂信男氏・神作光一氏『宇津保物語・俊蔭 全訳注』講談社学術文庫

『狭衣物語』 三谷栄一氏・関根慶子氏校注 日本古典文学大系

『夜の寝覚』 阪倉篤義氏校注 日本古典文学大系

『浜松中納言物語』 松尾聰氏校注 日本古典文学大系

『海道記』『東関紀行』 大曾根章介氏・久保田淳氏校注 新日本古典文学大系

和歌の引用は、すべて『新編国歌大観』による。

1 拙稿「『更級日記』―「白き祖」ということ―」（仮称）『論集日記文学の地平』所収 新典社 平成十二年三月刊行予定）

2 『更級日記』の冒頭部から終末部まで一貫して底流するのは孝標女の物語へのこだわりではないかとの視点から、以前論じたことがある。詳細は

- 『更級日記』冒頭部に関する試論』（『立教大学日本文学』第八十号 平成十年七月）を御参照いただきたい。
- 3 注1拙稿を指す。本稿は、注1拙稿（「富士山」部の比喩叙述に関して考察を加えた）の続稿に当る。注1拙稿を合わせて御参照いただきたいと思う。
- 4 引用本文に付した傍線傍点等は、すべて私に施したものである。以下、同じ。
- 5 秋山虔氏「更級日記の世界」東海上京の旅の記」（新潮日本古典集成『更級日記』解説 昭和五十五年）、三角洋一氏「孝標女とことば」（『ミメーシス』第六号 昭和五十年二月）など。
- 6 渡辺実氏「同定の論理―更級日記」（『平安朝文章史』所収 東京大学出版会 昭和五十六年）。
- 7 注6論文 p.197。
- 8 注6論文 p.197。
- 9 長崎健氏 濱中修氏「行動する女性 阿仏尼」（新典社 平成四年）に詳細な解説がある。
- 10 浅田徹氏「百首歌 祈りと象徴」（国文学研究資料館編原典講読セミナー③ 平成十一年）p.7。
- 11 『本朝文粹』卷十二所収。
- 12 山本登郎氏「富士と浅間」（『国語国文』昭和五十二年八月）p.26。
- 13 津本信博氏「『更級日記』の方法―主に絵画との関連について―」（『更級日記の研究』Ⅳ『更級日記』の成立 早稲田大学出版部 昭和五十七年）、小谷野純一氏『更級日記全評釈』（風間書房 平成八年）。
- 14 あかね会編『平安朝服飾百科事典』『紺青』項による。なお、『レポート笠間』No.40（平成十一年十二月）の「座談会古典文学における色と美」（伊原昭氏、岩佐美代子氏、千野香織氏、石川透氏）に、「紺青（金青）」に触れた部分がある。そこで、千野氏は、正倉院文書にみられる「金の青」が、イスラム圏から中国を経て日本に伝えられたラピスラズリであったことを指摘しておられる。
- 15 神野藤昭夫氏 NHKセミナー「古典への招待」（一九九九年五月一日条）
- 16 注1拙稿。
- 17 注1拙稿。
- 18 注1拙稿。
- 19 成瀬不二雄氏「平安時代の富士図について」（『美術史』134 平成五年三月）。
- 20 注19論文。
- 21 家永三郎氏『上代倭絵全史』第四章倭絵風景画の流行（墨水書房 一九六六年）。
- 22 注21家永論文他。
- 23 萩谷朴氏『平安朝歌合大成』（五二）〔天徳二年七月以前〕中宮歌合。「副文献資料」「考証」による。
- 24 『狭衣物語』卷二
- 25 「塩尻」については解釈が分かれているが、秋山虔氏校注『伊勢物語』（新日本古典文学大系）の脚注に従った。
- 26 村重寧氏「やまと絵にみる山水表現の展開」（『ミュージアム』313号 昭和五十二年四月）。
- 27 注19論文による。
- 28 本稿では、富士山図について、以下の図録及び所収論文を参照した。煩瑣にわたるため個々の注記は省略したが記して深謝申し上げる。
- 1 『やまと絵の世界』 東京富士美術館 昭和六十三年
- 2 『室町時代の屏風絵』 東京国立博物館 一九八九年

3 『特別展やまと絵』 東京国立博物館 一九九三年

4 『伊勢物語の世界』 五島美術館 一九九四年

5 『日本の心富士の美』 一九九八年七月

同書所収論文

A 鳥居和之氏「日本の心富士の美」

B 山下善也氏「描かれた富士—イメージ変遷と諸相—」

C 米屋優氏「富士の信仰とその美術」

29 注19論文。

30 注19論文。

31 注19論文。

32 注28 B 論文。

33 村重寧氏「やまと絵の一側面」(『特別展やまと絵 雅の系譜』所収 東京国立博物館 一九九三年)。

34 注13 津本論文に御指摘がある。『夜の寝覚』『浜松中納言物語』には次のような例がみられる。

○小姫君の夢に、いとめでたくきよらに、髪あげうるはしき、唐絵のさまたる人、琵琶をもて来て (『夜の寝覚』)

○そのありさまども、唐国といふ物語に絵にしるしたる同じ事なり。

○上手のかきたりし唐絵にたがはず。

○例の絵に書きたるやうなる人々、さし出でて見送るに (以上、『浜松中納言物語』)

35 注33 論文に、「やまと絵が登場したからといって唐絵が地位を失ったというわけではなく、あくまでも唐絵が正式な(晴の)ものであった」とされる。

また、千野香織氏は、「古代文学と絵画」(『岩波講座 日本文学史 第3巻』(一九九六・六)で、平安時代の清涼殿の屏風絵についての考察をさ

れ、「基本的に「公」表「唐」と「私」裏「和」という機能分担が認められ、「清涼殿の内部では、障子や屏風に描かれた「唐絵」と「和絵」が、建築内部空間の「公」と「私」の別を、視覚的に表明していた」と説かれる。なお、千野論文には、平安時代の屏風絵と歌枕についての研究史が簡潔に整理されていて参考になる。詳細については同論文に拠りたい。

36 上野理氏『後拾遺集前後』(笠間書院 昭和五十一年)。拙稿「高陽院関白藤原頼通—頼通中心の文芸世界をめぐって—」(『立教大学日本文学』第七十一号 平成五年十二月)。

37 注13 論文で、「果たしてどこまで現地の景観を忠実に伝えているのか、疑問である。(中略)富士の描写にもある一定のパターンが存在していたのであろう。」とされる。